

## <動向>

# 関西学院における 2020 年度の多様性尊重に関する取り組み： 第 8 回関学レインボーウィークを中心に

武田 丈

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で、関西学院大学の春学期の授業はすべてがオンライン化され、秋学期も対面授業はゼミのような少人数の授業など、限定的にしか開講されなかった。また授業だけでなく、学内のさまざまな行事、体育会やサークル活動などが中止されたり、限定されるなど、通常のキャンパスライフが奪われてしまった。こうした事態を招いた新型コロナウイルスは、中国の武漢を中心に感染が確認されてから数か月後にはアマゾンの先住民でも感染者が確認されるなど、いとも簡単に世界中に拡がり、多くの尊い命を奪っていった。交通機能の発達によって多くの人が簡単に国境を越えられるようになった現代では、残念ながら当然の結果なのであろう。

志村けんやアメリカのトランプ前大統領が感染したように、これも当たり前のことだが、ウイルスは人を選ばない。しかし、誰でも感染するリスクがあるにも関わらず、残念ながら検査や医療へのアクセスは世界中で平等にあるとは言えない。開発途上国、貧困者、外国人、セックスワーカー、スラムの住人といった周縁化された人たちは、後回しになっている現実がある。社会階層が低い人たちほど劣悪な環境で健康状態が悪い傾向にあり、抵抗力も弱いため、新型コロナウイルスの感染の可能性や、重篤化の可能性が高くなっている。アメリカでは、新型コロナウイルスの死者数に関して、ヒスパニックと黒人（アフリカ系）が、白人とアジア系よりも 2 倍ほど多かったと報告され

ている。つまり、ウイルスは人を選ばないが、人間が作り出した社会構造や、私たちが持つ偏見や差別によって新型コロナウイルスに関する格差が生み出されているのである。

日本の政府や自治体の新型コロナウイルス対策においても、「休校で仕事を休んだ保護者への助成金は、風俗業は対象外」や「朝鮮学校幼稚部はマスク配布の対象外」といった差別的な運用が批判された。ステイホームによって、家庭内でのパートナーや子どもへの暴力が増えたという報告もある。教育においても、オンライン授業を受けるための設備の準備状況の違いから学力の格差が生み出されてしまうという危機感も高まっている。こうした状況だからこそ、社会の中の多様性の尊重が重要であり、インクルーシブな社会をどのように実現していくべきかを議論することが不可欠であるように思う。

本稿では、新型コロナウイルスの影響で通常の 5 月ではなく秋学期（2020 年 10 月 5 日から 9 日）に、しかもオンラインで開催された第 8 回関学レインボーウィーク（以下、KGRW）をプログラムごとに振り返ったのちに、KGRW 以外の関西学院における 2020 年度の多様性尊重にむけての活動の進捗状況を報告する。

## 1. KGRW2020 のプログラム内容

今年度の KGRW は、「Borderless Colors」をテー

マのもとに開催された（以下のチラシを参照）。新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となったため、プログラムの規模を縮小せざるを得ず、4つのプログラムを開催した。



(制作：飯塚諒)

(1) パネル展

例年、西宮上ケ原、神戸三田、西宮聖和の3キャンパスにて開催してきた多様性尊重をテーマとした教職員からのメッセージ展は、今年度はスライドショーにまとめ、人権教育研究室のWebサイト ([https://www.kwansei.ac.jp/r\\_human/r\\_human\\_016347.html](https://www.kwansei.ac.jp/r_human/r_human_016347.html)) にて公開した。オンラインとなったことで、人の目を気にせずじっくり見ることができたという意見があった一方で、例年だとキャンパスでの展示に対してその場で付箋に感想を書いてもらうなどのフィードバックがもらえていたが、それができなかったのが今後の検討課題として残った。

(2) LGBT 関係図書の展示

今年度も関学図書館の企画として、2020年10月1日（木）から10月16日（金）まで、西宮上ケ原・西宮聖和・神戸三田キャンパス大学図書館、千里国際キャンパス図書館において、LGBTQ 関連の書籍の展示をしていただいた。また、関西学院大学のLGBTサークルのCassisのメンバーから推薦された図書リスト（以下を参

LGBT サークル  
*Cassis* メンバーからの推薦図書 14選

『13歳から知っておきたいLGBT+』  
アンソニー・マーデル (2017) ダイヤモンド社  
「すべてが網羅されたLGBTのことをまったく知らないためのパーフェクトガイド」

『僕の名前で僕を呼んで』  
アンドレ・アシマン (2018) オークラ出版  
切なく甘いひと夏の恋を描いた青春小説。

『Find Me』  
アンドレ・アシマン (2018) オークラ出版  
「君の名前で僕を呼んで」の続編！ 出会い、別れ、そして再会。止まっている人生が、再び歩き出す…

『オネエ産婦人科』 藤田トモ (2019) アンソニー出版  
テーマは「あなたがあなたらしく生きること」 笑って泣けちゃう命の物語。

『新同性愛って何? 一わかりあうことから共に生きるために』  
伊藤悟・三宅大二郎ほか (2003) 経世出版  
皆がそれぞれの自由を尊重しながら、共生できる社会を目指すためのQ&A!

『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて』  
ジュリー・ソンドラ・デッカー (2019) 明石書店  
アセクシュアルコミュニティと、その周辺の人たちにとって福音となる一冊。

『うつくしいこと』 木原音瀬 (2013) 講談社  
美しいこと 木原音瀬  
叶わぬ恋の苦しさや美しさを描き、舞台化もされた、木原音瀬の最高傑作。



照)も、人権教育研究室の Web サイトで紹介した。

### (3) 交流会

性的マイノリティの当事者、もしくは当事者かもしれない学生たちを対象とし、互いに交流することを目的とした交流会は、今年度は 10 月 9 日（金）の 20 時から 23 時までオンラインにて 14 名が参加して開催された。

### (4) 人権問題講演会

毎年関学レインボーウィーク中に開催される多様性尊重をテーマとした大学主催の人権問題講演会は、10 月 8 日（木）の 2 限にオンラインで開催された。今年度の講師は同性婚訴訟の原告の一人でもある田中昭全氏で、「僕らが同性婚を求める理由。」と題して、パートナーの川田有希氏にもゲストスピーカーとして参加いただき、講演をしていただいた。多様なセクシュアリティの基礎知識の解説からはじまり、同性パートナーとしてのお二人の暮らしをほのぼの語っていただくとともに、お互いの両親へのカミングアウト、特に田中さんが苦労された経験から、まだ

まだ日本社会の中での多様な SOGI への理解が不十分な現実が語られた。また、そうした中で、各自治体がパートナーシップ制度を採り入れたことで評価できる点、評価できない点（パートナーシップには法的拘束力がないことで、結婚と比較すると同等の権利が与えられていないこと）、そうしたことを踏まえて同性婚の必要性を具体例を交えながら語っていただいた。

今年度はオンラインで実施にしたことで、関東在住の方や海外在住の方にも視聴してもらうことができた。対面実施では参加できないような方にも参加してもらうことができ、来年度以降に対面開催に戻っても、オンラインでも参加できるなどの対面とオンラインの併用を今後検討していくこととなった。

なお、今回の講演会をオンラインで視聴した学生からは、以下のような感想をもらった。

性的少数者の代表として LGBTQ + が挙げられることは知っていた。だが、少数者といっても 11 人に 1 人の割合で LGBT の方々は存在している。これは、小中高のクラスにおいて 2

人から3人いることになる。この結果を知り、普通や異常な性や恋愛観また結婚観とは何だろうと考えるキッカケともなった。

お二人とも自分の性的指向に漠然とであるが自覚したのが小学校高学年だと語っていたが、その中で「覚悟しなければならないと思った」とあった。小学生が恋愛感情を人に抱くということは普通のことははずなのに、相手が同性であるというだけで子どもが「覚悟」しなければならないということは、周りが同性に対して恋愛感情を抱くことを否定していることの表れであると感じた。カミングアウトについての話を聞いた時には、親が受け入れてくれるということは自分の性的指向に対して自信を持てるということのように感じた。パートナーの親がすぐに受け入れてくれているところをうらやましいと感じたとあり、いくら、自分が自覚して友達にもカミングアウトして覚悟して生きていくと決めていたとしても、両親の存在は大きいのだと感じた。

今回の講演会で、新しいことを沢山教えていただき、自分なりに様々なことを考えることができ、良かったと思う。私は、今まで性的少数者の方と関わる機会があまりなかったため、新聞やニュース、ゲイの役がある映画やドラマを見ても、心のどこかで自分とは関係ないことであると考えてしまっていたのではないかと思う。しかし、講話でハラスメントやアウティングなどで、当事者でない人にも関わる問題であるということを教えていただき、これから社会に出て、様々な人と関わる中で、他の人を知らない内に傷つけてしまうことなどもあるかもしれないと思い、これからは、さらに興味を持ち、新聞やニュースなどを見たいと思った。また、自分に直接関係ないことであっても、同じ社会で生活している方々のことなので、様々なことに興

味を持つべきであったと考える。また、私は、同性婚について、反対してはいなかったが、最近では事実婚という形で本当は結婚していないという人などが増えているということ考えた時に、一緒に住むことは結婚をしなくても出来ることであるし、なぜこんなにも多くの人が結婚することを望むのか、少し疑問に思っていた。しかし、遺産相続の問題や、緊急時に病室にすら入れないかもしれないという問題があることを教えていただき、納得することが出来た。

## 2. 2020年度の多様性尊重に関する取り組み

### (1) 関西学院 インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針

昨年度のKGRWの報告(武田・織田, 2020)で、2019年3月19日に「関西学院 インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針」の制定に関して、行動指針の冒頭に書かれている「関西学院 インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針」の部分だけが公表されたと報告したが、2020年4月には以下の「II. 基本方針の実施にあたって」および「具体的な行動指針」([https://www.kwansei.ac.jp/kikaku/kikaku\\_003750.html](https://www.kwansei.ac.jp/kikaku/kikaku_003750.html))も発表された。

#### II. 基本方針の実施にあたって

1. 本行動指針の対象となるのは、園児、児童、生徒、学生および教職員(非常勤含む)など関西学院のすべての構成員である。
2. 学院内外の関係者・機関が連携・協力して、インクルーシブ・コミュニティの実現に取り組む。
3. 多様性が尊重されないために修学やサービスの妨げとなる事柄や状況が生じた際には、適切な制度に基づくプロセスによる合意形成を経て、合理的な範囲で係る事柄や状況を取り除く。

4. そのプロセスにおいては、多様性が尊重されないために修学や服務に関し困難な状況に置かれている構成員本人を交えて十分に話し合い、当該者の意向や選択などを尊重する。
5. 多様性の尊重を学則などに明記するとともに、すべての構成員に周知・啓発する。
6. 基本方針を実行性のあるものとするために、具体的な行動指針を以下に示す。

#### <具体的な行動指針>

1. インクルーシブ・コミュニティ推進施策を着実に実施するために
    - ①学院内外の多様性尊重に関する情報を収集・調査し、多様性尊重に向けて広報・啓発活動、教育等を行う
    - ②多様性の尊重に関する学問・研究の推進を図る。
    - ③学院の構成員として学生や生徒等の参加協力を重視し、インクルーシブ・コミュニティ推進に関する発言、参画の機会を保障する。
    - ④上記①～③を実施するために、学院のインクルーシブ・コミュニティ促進を統括する組織として、学院の責任のもとに「インクルーシブ・コミュニティ推進協議会」（以下、推進協議会）を設置する。
    - ⑤推進協議会は、大学、短期大学、高等部、中学部、初等部、幼稚園、千里国際高等部・中等部、大阪インターナショナルスクールの各学校と学院のダイバーシティ推進本部、ハラスメント相談センター、大学の組織である総合支援センター、人権教育研究室など学院内関係部局と連携し、多様性の尊重に向けて協働する。
    - ⑥推進協議会は、インクルーシブ・コミュニティ実現の推進状況や効果について
- 分析評価し、その結果を学院内外に示すとともに、学院内関係部局にフィードバックして現状の改善を促す。
2. 男女共同参画を促進するために
    - ①関西学院の組織、意思決定プロセス、政策立案、予算等の作成と実施、評価などの全てのプロセスにおいて、男女共同参画の機会が確保されることをめざす。
    - ②関西学院における教職員の男女の構成比をデータ（後述「3. 性的指向や性自認の多様性の尊重」に配慮した上でのデータ）として定期的に公表する。男女の構成比に偏りがある場合には、是正するように努力する。
    - ③教職員のワークライフバランス施策（産前産後休暇、育児休業、介護休業等）を明確にし、その利用促進を、各部署において図る。また、ワークライフバランス施策の利用状況のデータを定期的に公開する。
    - ④生物学的な性差やジェンダー（社会的・文化的な性差）によって特定の構成員が不利益を被ることがある場合には、学院は必要に応じて相談機会や支援を提供し、改善をめざす。
  3. 性的指向や性自認の多様性（SOGI の多様性）を尊重するために
    - ①自認する性に基づく通称名を学院内で使用することを認める。
    - ②構成員本人が意図しない形で本人の性別情報が公表されることがないように、性別情報を含む個人情報情報は慎重に取り扱うとともに、必須の場合以外には性別に関する情報を収集しない。また、性別に関する情報を収集する必要がある場合には、本人の自認する性別を答

えることが出来るように、回答欄を空欄（自由記述）にしたり、選択肢の中に「その他／答えたくない」などを含めたりするようにする。

- ③ SOGI 等に関する公表の自由を、個人の権利として保障する。
- ④ これまで男女別という区分に基づいている、トイレや更衣室等の学院内施設、定期健康診断、体育実技などの授業において、SOGI の多様性にできるだけ配慮を行う。
- ⑤ 就職活動やインターンシップに関して多様な SOGI に配慮した相談を、学院内外の関連部署と連携して提供する。
- ⑥ 構成員の福利厚生への適用や、教室および職場における性別に基づく呼称の使用に関しても、SOGI の多様性にできるだけ配慮を行う。
- ⑦ SOGI に関連した相談の対応者（総合支援センターやハラスメント相談センターなどの教職員）へ具体的な事例や対応について研修を行う。

#### 4. 障がいがある構成員支援を実施するために

- ① 人事課や大学の総合支援センターなど学院内の関連部署や学外機関との密接な連携の下で適切な支援策を企画立案するため、障がいがある構成員に対して必要に応じて個別の実態調査やニーズ把握を行う。
- ② 障がいがある構成員とその関係者（保護者・保証人や介助者等）とともに、支援のあり方について定期的に協議する場を設け、以下のことに取り組む。
  - i 大学においては「障がい学生支援に関する基本方針」と「障がい学生支援実施基準（ガイドライン）」に基づいて、着実に個別支援を実施すると

同時に、課題があればその改善を図る。

- ii 大学以外においては、大学に準じた対応を可能とすると同時に、それぞれ独自の基本方針と実施基準を策定することをめざす。
  - iii 教職員に対しても学生と同様の基本方針と実施基準を策定することをめざす。
- ③ バリアフリー化、既存の建物や設備の改修、あるいは新しい建物や設備を導入するにあたっては、事前に相談する場を設ける。
  - ④ 障がいがある構成員の多様性と独自の文化が尊重されるように、情報提供や交流機会の設定などを行う。

#### 5. 文化的多様性を尊重するために

- ① 多様な文化的（国籍・民族・言語など）背景を持つ人たちによって、学院が構成されることをめざす。
- ② 多様な文化的背景をもつ構成員について、それぞれの生活習慣や宗教的背景などを理解し、文化的多様性に配慮した環境改善をめざす。
- ③ 多様な文化的背景をもつ構成員について、必要に応じて、学院内関係部局が連携しつつ、言語に配慮した相談の機会や支援を提供する。
- ④ キャンパスにおいて文化交流の場を設け、多様な構成員のあいだでの交流を積極的に行う。
- ⑤ 多様な文化的背景をもつ学生の就職活動やインターンシップ時の相談の機会や支援を、学院内関係部局が連携して提供する。

この行動指針は、SOGI だけでなく、ジェンダー、障害、文化・国籍・民族など、キャンパス内のさまざまな多様性の尊重に関するものであり、今後はこの行動指針に基づいてキャンパス内のさまざまな教育、研究、学校運営が実践されることが期待される。上瀬（2018）は、セクシュアリティに関する偏見・差別のもっとも大きな課題は、たとえば現行の戸籍制度では生まれてきた時の体の形で男女いずれかにしか割り当てることができなかつたり、同性での結婚が認められなかつたりするなど、現行の制度が差別を容認している点にあるとして、偏見解消には社会的・制度的にセクシュアリティに関する偏見や差別が否定されているという認識が広まることが重要だとしている。したがって、今後はこの行動指針の内容を多くの関西学院の構成員に認識してもらうことが不可欠となってくる。

本来であれば、この行動指針の発表直後の 5 月に開催予定であった KGRW においてプレスリリースするとともに、2020 年度中に行動指針発表記念シンポジウムを開催することで、学内外に関西学院における多様性の尊重の取組を周知する計画であった。しかし、残念ながら新型コロナウイルスのために、KGRW はオンラインで規模を縮小して秋学期に開催、また記念シンポジウムに関して 2021 年度への延期を余儀なくされた。

しかし、現在 2021 年 5 月 17 日の週に開催予定の第 9 回 KGRW 中のプログラムとしてこの記念シンポジウムの開催を計画しており、1 年遅れになってしまうが、「インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針」が学内外へ周知されることを期待している。

また、この行動指針の中には、「学院のインクルーシブ・コミュニティ促進を統括する組織として、学院の責任のもとに『インクルーシブ・コミュニティ推進協議会』を設置する」とあるが、やはりこれも新型コロナウイルスの影響でまっ

たく動いてない。これに関しても、パンデミックが収まった段階で速やかに設置し、この協議会が学院をインクルーシブ・コミュニティへと導くドライビングフォースとなることが期待されている。

## (2) 長期戦略における取組

これも前回の報告で紹介したが、2018 年 2 月に発表された関西学院の創立 150 周年にむけた「Kwansei Grand Challenge 2039」の中の前半 10 年間（2018-2027）の方向性を示す「長期戦略」の 1 テーマである「関西学院のアイデンティティ共有」の中で、「関西学院大学人権教育の基本方針」に基づき「関西学院全体での人権教育の推進」と「インクルーシブ・コミュニティ構築」の実現を目指していくことが計画された。「関西学院全体での人権教育の推進」に関する 2020 年度の具体的な成果としては、学院内の各学校や学部で行われている人権教育に関する研修や講演会のデータベースを構築し、2020 年 10 月から学院内で公開を始めたことがあげられる。これにより、各部署や学校が独自に行っていた人権や多様性尊重に関する啓発の取組の情報を容易に共有できるようになった。

一方、「インクルーシブ・コミュニティ構築」に関しては、多様な背景を有する卒業生のライフストーリー集を作成することによって生徒や学生にキャンパス内の生活や進路に関するロールモデルを提示するとともに、キャンパス内の多様性を可視化していくことを目指して、本学の LGBTQ+ の卒業生のライフストーリーを、KGRW の開催の週からお一人ずつ、合計 6 つのライフストーリーを人権教育研究室の HP ([https://www.kwansei.ac.jp/r\\_human/news/detail/137](https://www.kwansei.ac.jp/r_human/news/detail/137)) で公開した。ライフストーリーの共有にご協力いただいた 6 名の卒業生の方々に改めて感謝を申し上げたい。現在、ネット上で公開しているこれらのライフストーリー集の紙媒体での出版準備を行っており、来年度以降には現役生の LGBTQ+

のライフストーリー集を作成していくことも計画されている。将来的には、SOGI以外の学生や卒業生のライフストーリー集の作成も望まれる。

さらに長期戦略の中では、教職員や学生に対して SOGI に関する研修（アライ研修）を実施し、受講者に対して認定証を発行することで、インクルーシブ・コミュニティ構築の基礎を築いていくことも計画され、来年度以降からの開始に向けて、研修内容の検討が始められた。

#### 参考文献

上瀬由美子（2018）「セクシュアリティ」北村英哉・唐沢穰編『偏見や差別はなぜ起こる？：心理メカニズムの解明と現象の分析』（pp. 169-186）.ちとせプレス.

武田丈・織田佳晃(2020)「第7回関学レインボーウィークを中心とした関西学院における多様性尊重の取り組み：Kwansei Grand Challenge 2039にむけて」『関西学院大学 人権研究』24, 61-69.